

「地域力は全てに通じる」

真田 俊一 代表理事

只今、ご紹介にあずかりました真田です。16年間後志の観光開発、いろんな意味で顔になっておりました。私は顔にはなりますが実行部隊にはなかなか成れないんじゃないかと思っていますが、大変、実行力あるメンバーでございますからそういう意味では皆様よろしくお願い致します。

私は元々、基本的には水産業の方で専門でございました。道におった時も日本海を全部、稚内からですね、渡島、函館まで全部勤務致しました。この管内では余市にございます中央水産試験場、この場長をやっておりました。その関係でこの日本海の雰囲気はよく知っています。私が皆様に語れる問題としては一つは今、鯨が獲れだしてありますよね。で、あの時にですね、私が道の水産部長をやっておまして、それで鯨を呼び戻そうと声掛けをしたんであります。で、それが全ての人から反対でした。何故、反対かということ、まず、鯨がいなくなってから鯨の研究をしていないんですね。それから、あいつ群来するような鯨の種が日本にないんです。要するにロシアにはあるけれども、そっちから種を持ってくることはなかなか難しいということで御座いました。ま、そこはぎりたい外交ということもあって道の力では駄目だろうと、研究者の方がピリッとしなからおそらく鯨より難しいということでありましたが、やっていったら病気になるで鯨よりも楽だったそうですね。私が1番基本に置いたのは、鯨ということになれば、この日本海全体が奮い立つんですよ。昭和29年に幻の魚になりましたが、それから何十年も経つのですけれども、網を作りまして何時来るか、何時来るかということでは待っていました。そんな関係で私は希望を持って、そこで頑張れるんだというお話をいたしまして、すぐに鯨が戻ってくる自信はありませんでした。けれども、思い入れだけでそういうことをやりました。で、鯨は3年経たないと鯨と同じで戻って来ないんですよ。ところが神様はうまくできたもんで、2年で帰ってくるようになりました。

私が何を訴えたいかということ、やはり夢を持って実行に移すことが大事だと、こう思っています。昔は日本海が金持ちの集落だったんですね。北海道の金持ちって言えば、この日本海の人たちだった。それで、鯨がいなくなると貧乏人といえば日本海。その時に鯨が来たときに貧乏だといわれておったオホーツクの方は踏ん張って、鯨とホタテでホタテ御殿を作った。金持ちって言えばオホーツクの方では漁師のことをいうんですね。

未だにここは函館本線ですね。で千歳のほうが垂流であります。それが千歳のほうが主流になって、こちらに特急も走らないような状況になってそれを指をくわえていいのか？これは日本海のほうが表、太平洋のほうが裏日本だったのです。それが逆になったのはソ連という仮想敵国があったからですね。ところがそれが無くなったのですから今度は希望を持って日本海を開発できる。ま、そんなことを考えながら今、これから日本海を開発するときにはどうしたら良いんだということを考えます。私が思うのに日本海の方々は先祖のために生きていようような気がします。なぜならば、先祖が作りあげた土地や家を手放すことは非常に先祖に申し訳ない。だから、人にも貸さないし売りもしない。そんなことから生産性の無い土地柄となった。だから私が住んでいる小樽は札幌に近いんだ。誰が考えたって札幌のほうが便利いい。だけど、売り買いがあるからそれなりの形になってはいますが、小樽は売り買いをしないから本当にちょっと売り物が出るだけです。だから高いんですよ。小樽商大の大学生は生活の都合上、札幌です。半分以上は札幌なんです。だから小樽はどんどん錆びれ人口が減っていくんです。そこで私が皆様

に訴えているのは、過去にではなくて未来に生きましよう。この日本海の土地や産物を未来のために生かす算段をしようではないか、そのことが先祖が喜ぶことである。そういうふう思うわけでありませぬ。で、どうもお互いにだんだん経済が経済力、人の足を引っ張っていく、人を蹴飛ばして上に上がって満足する。これじゃ能力が高まりませぬ。人が上がってくることを喜んで競争しながらその上にいく実力をつけて上がっていくことが日本はおろか、グローバル化世界の中でこの北海道の日本海がたいしたもんだ、実力があるといわせると思うんですね。そういう将来計画の中で考えるとソビエトがロシアになりました。北朝鮮との問題もありますが、やがて統一されるということもあるでしょう。

中国も市場経済に参加し、そういうなかでは、北海道の余市のリンゴが仁木のリンゴが1個千円で売れる。向こうに行くとかかりますが、落ちリンゴのような、山リンゴの親分しかいないんです。寒いから。中国の人、13億。そのうちの1割が金持ちだとしても日本の人口が少ない。だから、たいがい人は北海道のリンゴを食べませぬから1億2千万人の人が食べれるということですね。そういうことに目を開いて考えなければならぬ。飛行機で飛ばすにはあまりに運賃が高いからやはり船だとそこに気がついて対外貿易のために港づくりをやったのが新潟であります。

北朝鮮のマンボンギョン号が入れるには新潟。私は岩内であろうと、小樽であろうと、留萌であろうと何万トンの船が港に入れるように今、作り上げておかなきゃいけないのですが、いざやろうとする時には金がない。何でも金があれば解決しなくてもよいという話。だけど、ないときほど将来に目を向けて準備をすれば良いわけです。たとえば100億かかると致しましてですよ、何もしなかったらどうなる。何年経っても100億の港は作れない。そのいい例が北海道の米づくりであります。

明治政府が開拓史を作って北海道に米を作ろう！と考えたのであります。それから延々と百数十年、ダムを作り、かんがい用排水を作って、整備して、土地改良をして日本一の米どころにしたのであります。あの時、明治の人たちがこの北海道に米が作れるはずがない！としたら今日はない。それを考えたときに我々は今、何をしなければならぬか、貧乏な時代に甘んじてよいのか、となるんですね。

長期計画と今、我々が生きているそのなかで喜びを工夫しながら人生を謳歌するということは苦しみの中からでない喜びはないのであります。だから楽な道を行こうとする。殴られてから、1度殴られてからみつけるこれが人間の真理であります。したがって同じ物の考え方を共有して、そして頑張る、そんなことが出来ればまことに良い地域になると思うんですね。ですから、今、まことに残念なことであります。何処に住んでも、どこの学校へ行ってもいいんです。したがって都合の良いところへ皆、移って行く。だから江戸時代にはそうではありません。関所があって後志の国から出られないのであります。出るときには村八分にあつたのであります。村にいるときには必ず仕事があつたから村社会がありました。ですから村八分にあつたということが大変な人生に苦痛を伴うものであつたのです。その人たちが集まつたのが無宿者の江戸であります。今、自由になったから、働く場が無いから札幌へ行こう、東京へ行こう、それでいいでしょう。自由だからいいんです。自由だからいいんです。だんだん港は疲弊していくことになりませぬ。そして大事な自然との関わりや、そして人間と人間がふれあう大事な愛情とか友情とかいうものが失われとなりの部屋の人や誰か分からないようなそんな生活がほんとうによいのか。

戦後、大変な食糧難の時代がありました。私が知ってるかぎり、隣近所よく味噌や塩や砂糖まで皆で貸し合って助け合いました。今、そんなことする人いますか？

しかしながら、そんなものの欠如した中でも人間の気持ち、心というものは豊かだつた。そんなことが残

っている後志であろうと思っています。そういうものを大事にしながらい若い者に後志の中で生まれ、育った子供達が働く場を提供できないような大人の社会があつてよいのかと考えたとき、我々は今、子度身たちに未来を希望を与える地域社会に作り上げていくことが無くなつてゐる。これは大人の責任であろうと思ひます。ですから平等など公平など色々な意見がありますが、小樽市役所の三分の一が札幌から通つてゐるという現状に対して私は人口を減らしたくないという意味の中で、なぜそんなことが起きるのかというふうにして市長に申し上げた。市長はこう言ひました「優秀な人間を得るために全道一円に試験を受けるチャンスを与へた。そしたら小樽の子供がうからなくて札幌の子供が合格し、それはやもえない。だから私はこう申し上げた。「市長、住民投票やるべや。小樽の市民で小樽の子供を入れるのが正しいのか、優秀か優秀でないか試験問題がおかしいと思ふんだけど札幌の人間をとることが本当に小樽の発展になるのか、公平だ、平等だと言おうと市民が決定を下したら従わなきゃならないよ。」これを大きくいうなら「知つてしまふ」人間で後志を作る。こういうことだと思ひます。

したがつて私が小樽の観光協会会長になりましたら3つの方針を掲げました。

一つは今まで会員の皆様から会費を貰つて運営してきてたのでありますが、観光協会の会員の皆さん方の売上向上のためにどれだけの働きをしてきたのか。会員の皆さんの売上上がるような施策をとろうじゃないか。そして、小樽の人間が札幌ばかりに目を向けて物事を考えてきたのは過ちだ。後志の皆さんと共にどうあるべきか論じながら小樽は兄貴分として、これはただ人口が多いという意味でありますから誤解しないで下さい。そういう意味で連携を保ち、そして皆さんでこの後志を良くして、その中の役割を果たそうじゃないか。そして第3番目は小樽にも若い人たちがいます。観光のため一生懸命頑張る人たちがいます。したがつてその人たちの頑張る、この意欲に対して観光協会の理事を務める大御所の人たちは環境を整える努力をしなければならぬ。若いもんが頑張れるような協会に変わらうじゃないかと提案いたしました。こういうことができるかどうかはひとえに、ここに集まられてゐる皆さん方の心づもりと連携によるものではないかと思ひます。その先頭に立つ観光でありますそれがそれでツーリズムの代表に就任致しました。私の力とはとるにたらない力ではありますが皆さんが共に歩むということでその身を果たせれば大変、幸せなことだと思ひます。ま、そんな意味で想ひだけはお話致しました。

(平成19年11月19日しりべしiシステム事業スタッフ研修会、交流会冒頭での講演)